



タイの首都バンコクから北へ70^キに位置し、観光遺跡があるアユタヤ県は、広大な水田が見られ、日系企業が進出している工業団地も多い。ちょうど10年前の2011年8月から12月にかけて、大洪水による災害が発生。取引先工場にある柱の高さ2・5^ミの場所には、洪水の跡が今も残っている。タイを縦断するチャオプラヤ川の全長は約1100^キで、日本最長の信濃川の約3倍。多くの支流が集まり勾配が緩やかなこの川は、世界有数の稲作地帯を発展させてきたが、上流で大雨が降ると、各所で浸水被害が発生する。今年も10月に入ると、洪水情報が地元ニュースで取り上げられるようになった。

10月7日、同県のバーンバーン

タイ・アユタヤ県の工業団地

周辺の洪水対策が急務



洪水の爪痕が残るアユタヤ県内
＝タイ

郡を訪ねた。驚かされたのは、主要道路脇に重機を使って積み上げた堤防が造られていたこと。安八郡輪之内町の水害から町を守る「輪中」という独自の堤防を思い出した。高さ2^ミ、長さ約500^ミにわたって積み上げられた粘土質の堤が氾濫する川の水を遮断する一方、堤内にある住宅は床上浸水に。日本なら避難指示が出る状況にもかかわらず、住民は避難することなく住み慣れた家から離れたこととしない。浸水で汚れた衣服が物干し台を埋め尽くしていた。腰まで水に浸かって歩く高齢者にカメラを向けると、「小屋の中の浸水も撮ってください」と慌てた様子はない。洪水との共存を運命

と感じているように思われた。バンコクに戻る途中、例年なら緑一面のはずの稲作畑が大きな湖と化していた。水面には青い空が映っていた。農家にとっては大きな損失に違いない。

幸いにして、今年の洪水はアユタヤ県の工業団地に被害を与え、レベルではないが、バンコクを流れるチャオプラヤ川は10月初旬から水かさが増し、流れも速くなっている。バンコク都庁は住民に流域の浸水への警戒を呼び掛けている。

例年、タイの雨季は11月に終わる。水が引けば洪水の話も消えるだろう。バンコクでは地下の貯水施設やトンネルを造る治水基本計画があるが、土地の所有権問題で完成に至っていない。水害から生命と作物を守るためにも、洪水発生区域での今後の治水工事の進展に期待したい。

(岐阜信用金庫バンコク駐在員
事務所長 高橋英孝)